

演習形式授業の研究

——研究演習・教養演習・基礎演習——

小柳公代

まえがき——「演習」という授業——

「演習」と言えば、昔から、どの学部でも、大学に在籍した証しのように「XX教授のゼミでした」ということばで表現される、あの「ゼミナール」を想起する。それは、愛知県立大学外国語学部フランス学科の場合、3・4年向けに開設され、1998年に長久手キャンパスへの移転後も同じく、「研究演習」と呼ばれているものである。

現在、「研究演習」は1年間で4単位になる。しかし、高田町キャンパスでは2単位ものだった。体育や実習ものと同じく、学生が働き、身体と頭を使う科目は単位数が小さく、教員が準備に多大の時間を使って学生は聴いているだけですむ(?)講義もの授業は単位数が大きいという、不思議な現象の一つだった。私自身の学生時代にも、体育は半年で2/3単位であって、1年半授業に出ると2単位という必要数を満たして終わり、「もう身体訓練は要らないということかな?」と、奇妙な感じがした記憶がある。長久手への移転時に、ゼミばかりではなく、「研究講読」も「原書研究」に名称変更して4単位ものに変身した¹⁾。

新キャンパスへ来たときに、「教養演習」・「基礎演習」という授業が新設された。「演習形式」とはどんなものを指すか、教員によって思うところは同じではないだろう。私も同僚たちと意見交換をしたりしながら、「演習科目」の眼目は「学生主導」ということであろう、単位数がどれだけであれ、対象学年や授業の内容が違っても、「演習」は、基本的に、学生が創意をこらし、調べ、発表するものだと考えて、試行錯誤を重ねてきた。本稿では、大学教員としての勤務最後の年までの、自身の経験をふりかえってみたい。

執筆にあたっては、学務課・図書館に保存されている過去の「学生便覧」「授業時間割表」「シラバス」などを参考にした。それらの印刷後に変更が起きて本稿記述と異なっている場合はご容赦願いたい。

I 研究演習

1. 「研究演習」いわゆる「ゼミ」をとりまく事情

愛知県立女子大学が、男女共学の愛知県立大学として発足して3年目、1968年に私が助手(現在の助教)として赴任したとき、既存文学部、新設外国語学部とも、助手の人数は多かった。もっぱら教材づくりや図書購入手続き、お茶くみ、電話番号など、学科・学部の「雑用」係であることが期待されており、ティーチング・スタッフではなかった²⁾。外国語学部で先輩助手が中心となって授業担当を要求したことと、学科によっては助教(現在の准教授)以上の方々が次々に本学を去られるという事情が重なって、まずは土曜日夜の一般教育外国語授業が助手に任せられるようになった。いわゆるティーチング・スタッフの授業負担は4コマだったので、助手はその半分の2コマまで担当させてよし、ということになった³⁾。

助手の処遇をめぐるって学部がぎくしゃくしてから数年、外国語学部助手定数11を講師3・助手5・事務職員3の三種職に分割することで解決ははかられ、3人の助手が講師に昇格した。その後の8人の助手は退職・転出・講師昇任と途がわかれた。しばらくして助手公募も講師昇任を前提におこなわれるようになり、「助手の授業は2コマ、赴任初年度から担当する」というシステムができあがった⁴⁾。だが数ある授業科目の中で、「ゼミ」は最高度の重要科目であって、助手ごときが担当するなど、誰も考えなかった。あるとき一人の助手が、「教育経験の少ない助手が担当する授業は、むしろ、ゼミのような、自分の研究や専門を生かせるものいいのだ」と言ったとき、目の開く思いがしたものだ。

私自身がゼミを初めて担当したのは1975年4月で、振り返れば、助手最後の年度だった。その後は、メモによると、78年、81年、83年、85年と、おおむね隔年で担当している。「基礎フランス語」を筆頭とするたくさんの1・2年生向けフランス語科目が語学・文学分野の教員にゆだねられていたために、語文分野教員は、専門研究領域を活かす授業としてのゼミも、オーバーワークを避けるためには、各論と交代に隔年で持つしかなかったのである。

他方で、いわゆる「地域」分野(歴史もふくむ社会科学分野)の教員は、もっぱら3・4年生向けの専門の授業を担当し、毎年ゼミを持つ。学生たちには「卒業論文=ゼミテーマ」の意識があり、大多数は3・4年を通し

て同一教員のゼミに所属しようとする。したがって語文分野ゼミを3年生で受講した学生は、翌年になるとそのゼミが消えて杳然とするという状態がつづく、しだいに学生が敬遠して、語文関連の卒業論文は年々少なくなっていく⁵⁾。私は、オーバーワークでもかまわないから毎年ゼミを担当させてほしいと何度も学科へ要求して、それがかなった時から数年は、毎年ゼミを担当した。しかし長久手校地へ来てからは、担当コマ数の増加、評議会の仕事などが重なり、自分の専門は大学院の授業で活かすこととして、学科の文学ゼミは別の教員に毎年開講してもらうという棲み分けをおこなった。したがって長久手では3回しか昼のゼミを持っていない（他に卒業論文とは関わらない夜間主ゼミが2回）。

2. 試行錯誤のゼミ授業

研究演習の授業を持ち始めたころには運営に悩むことが多かった。どうすれば学生が活発に参加するのか？ 教員はどのように介入するのがよいのか？ 卒業論文のテーマとどのように結びつけさせるのか？ 自身の学生時代は参考にならない。講座制である仏文の教室では、もともと学生数が多いのではないだし、講座には教授と助教授の二人しかいない上に助教授が留学中だったから、ゼミを選択するという行為もなかった。「演習」と「講義」の授業の間に特段の区別もなかった。フランス学科の教授たちに、どうしたらうまくいくのでしょうか？と尋ねても、これといった示唆はえられなかった。

楽しくできたと実感できた最初のゼミは、パスカルの『パンセ』をテーマにしたときだった（1986年度）。4年生学生6人のうちほとんどは1年次に週2回の基礎フランス語を、2・3年次に講読や各論を受講していた学生だったので、気心が知れていたせいもある。学生には、すでに知っている教員の授業を選択する安易さがある、そのこと自体は残念な傾向なのだが、ことゼミに関してはうまくいく要因になりうると思う。また、就職活動についても、まだこのころは企業の側に節度があって、現今のように「4年次学生はほとんど授業にでられない」などということにはなかった。年末には学生がクリスマスパーティを計画したが、それぞれが『パンセ』の一節を暗記してきてレシテーションをしたり、その場で出されたクイズもみなパスカルがらみだった。それまでパスカルを卒論に選んだ学生たちは、中途退学したり順調ではなかった。しかし、このゼミの学生たちは「明

るいパスカル」をやるのだと元気がよかった。

次に印象にのこっているのがフランス最初の本格的小説と言われるラファイエット夫人の『クレヴの奥方』を取り上げた年である(1996年度)。当時、ゼミは通年科目であって、1年間のスパンで成績評価をした。学生は年度で2、3回当番が回ってくる。学年当初は4年生を順に当番にし、次に3年生が担当するが、1回目の発表ほどの学生も声小さく、資料も要領をえず、いらいらしてしまうことがあった。それが2巡目になると、見違えるように発表がうまくなっているの、「いつのまに?」と、うれしい驚きを味わったものである。今はゼミも半期ものにさせられ、学生の成長を待つ余裕がないのが残念である⁶⁾。

このゼミも学生の成長を実感できた中の一つである。「教科教育法」を兼ねていたため多人数で、6年生が1人、4年生が12人、3年生が7人だった。学年末の課題「①クレヴの奥方は、クレヴ公の死によって自由の身になったにもかかわらず、ヌムール公と結婚しなかった。その選択にいたる奥方の心理的葛藤を跡づけよ。②この作品をはじめに読んだときと1年間のゼミのあととは、登場人物に対してどのように見方が変わったか」に対するレポートでは、どの学生も読みが深まり、自分の感じたことを自分の表現で書いていることがよく分かったし、学生の意見に教えられることも多かった。学生もクラスメートの解釈を知りたいだろうと考え、まえばき・あとがきも加えたレポート集(73頁)を作成した。半数の学生が原稿用紙に手書きのレポートで、それぞれに文字の特徴があり、これにも懐かしい思いを抱く。このころ文・外の教員が集まってときどきおこなっていた「文学研究会」で、このゼミの運営と成果について発表をしたこともあったなと思出す。

3. 打ち合わせ方式

その翌年(1997年度)もゼミを担当した。ラシーヌの悲劇『フェードル』を取り上げた。前年から継続受講の学生もいた。ゼミのテキストは、それまでは受講人数が確定すると、きちんとした研究者用の原書をフランスから取り寄せていた。この年度には、フランスの高校生用かと思われるポケット版をテキストにした。廉価であるが、ラシーヌ研究者が編集し、作品の時代背景などの解説、現代と異なる意味をもった語などへの豊富な註があり、さらに、数場面ごとに内容把握の確認やレポート課題になりそうな、

多くの質問事項を列挙した頁が設けてある。あらかじめ質問頁を学生に振りあてて、担当学生はそのうちどの質問項目を使い、どのように授業を進めるかの計画をたてた上で、教員と事前打ち合わせをした。明らかな誤りがあればその時点で注意をした。私は担当学生がどのように解釈し、どのように進めようとしているかを把握した上で、授業進行を見ていることができた。

このやり方は、名古屋大学英文科の教授であられた川崎寿彦先生の授業に感嘆して、少しだけその真似をさせていただいたとも言える。必要あって、卒業後に母校で英米文学の授業を1年間履修したことがある⁷⁾。川崎先生に受講の了解を得た。テキストはジョイスの短編集『ダブリン市民』だった。1篇ごとに、学生はあらかじめ作品を読み、レポートを提出していなければならなかった⁸⁾。川崎先生は受講学生全員が、どのようにその作品を解したか、手の内をすべてご存知で授業を進められるわけである。教室でレポートをめくりながら「Tさんは、主人公のこの動作にこのような意味があると書いていますが、それは少し深読みにすぎますね」「面白いことに、南山大学の学生たちは、多くがここの箇所注目していて、名古屋大学の学生たちと指摘する所が違うのです」などと話される。もし、事前に自分の読解を提出することなく授業がおこなわれたならば、先生が「ここはこう解釈できる」という話をされれば、「なるほど、そのとおりだ」と思ってしまう、あたかも自分もそう解釈していたかのようにすると自分のものにしてしまうだろう。しかし、先にレポートを提出しているときには、そのような無意識のごまかしもできなくなる⁹⁾。

川崎先生の授業方式は、学生側に初習のフランス語で書かれた文学作品では無理であり、長編作品ではいっそう難しい。しかしこの年度に使用した教科書版では、ところどころの質問事項が、或るまとまりを区切り、さらに学生の理解をうながすガイドの役目をしていたので、担当学生が準備するにも、出した宿題をクラスメートがやってくるにも好都合だった。私も、担当学生の手の内を知っていて、援助もつつこみも効果的にできるというものである。

難しい古典劇だったが、『フェードル』に関する学年末の学生レポートにはすぐれたものが多かった。学生からは「昨年のように1冊にまとめてください」と要望され、ぜひそうしたかったのだが、この年度は何の用であったかひどく多忙で¹⁰⁾、ついにレポート集を作れないままで終わってし

まい、卒業していく学生に申し訳ない気持ちでした。

この年度以降、ゼミはいつも担当学生と打ち合わせをしておこなう方式にした。

4. 「研究」の喜びを知る

昼間主ゼミは2004年からは担当していない。そのあと夜間主ゼミを2回持った。そのうち、内容区分「文化」で「印象派絵画」をテーマにしたとき(2006年)が思い出深い。クセジュ文庫の同名の原文と白水社から出ている翻訳とをテキストにして、学生に各章を割り振った。印象派の個々の画家をとりあげる者、彼らが影響を受けたイタリアのルネサンス時代の画家の作風を調べてくる者、戸外で描くことができるようになったのは、その場で使えるチューブ入り絵の具ができたことによるなど、テキスト以上のことも学生はよく調べてきた。担当学生は、かさばって重量のある美術全集を本学の図書館や地元の図書館から何冊も借りてきて、友人たちに示した。毎回、バラエティに富む新しい知識がえられて、率直な感嘆の拍手がおこり、さらに次の担当者の意欲をかきたてたようだった。また、高田町時代には考えられなかったこととしてコンピュータの活用がある。WEBで古今東西の美術作品を閲覧することができるし、それを自分のファイルにとりこみ、カラー印刷してクラスで配布できる。発表担当の学生とともに、学科の共同研究室でカラープリントを作製したのも懐かしい思い出である。前期のレポートは、どの学生もカラーさし絵の入った力作ぞろいだった。これは学生経費を使ってカラーで複製をつくり、透明カバーをつけた美しいレポート集冊子に仕上げ受講学生に配布した。

このゼミの成果として学生が話してくれたことでうれしいものが二つあった。この年の終わり頃、受講生が食堂で私のところにやってきて、いずまいを直すというような感じで正面に座った。「ボストン美術館で展覧会を見ました」と話しはじめた。「わたし、印象派の本物の絵を見るのは初めてだったのです。筆がさあーっと動いて絵の具を塗っていったのだということが、本当にわかりました」と、緊張と喜びで高揚したようすで語った。言わずにはいられないという感じだった。冬休みになったら、また友人と絵画展を見にいくと学生は言っていた¹¹⁾。もう一つは、発表資料をカラープリントにするのを手伝ってやっていたときだ。学生が目を見開かせて言うには、「先生、研究するって、本当に楽しいんですね」と。学

生が主体となって、指示した以上のことを調べてくる演習形式だからこそ、学生も味わうことができた喜びであろう。

II 教養演習

1. 新基軸科目としての「教養演習」

「教養演習」は、高田町から長久手町への移転に際して、とりわけ意気込んで新設された科目だった。私自身は移転関連のどんな委員会にも関わったことがなくて、討議経緯はよく知らないが、新校地での「めだま科目」として教授会でたびたび趣旨説明がなされたという記憶がある。いわく、高校教育と大学教育をつなぐ、少人数クラスで大学での学びの基本を教える、学部学科にとらわれない内容にするために全学シャッフルしてクラスをつくる、誰が担当しても同じメニューが提供できるようなマニュアルを作る、等々。全学、前期に時間帯をそろえる仕組みで発足。昼間主コースは水曜日1限、夜間主コースは月曜6限と定められた。

この科目の初年度のシラバスは、移転のときの将来計画委員会の手で執筆されたと思われる。一般教育科目の頁の一つに統一シラバスとして、「対象1年生」、「時限月6/水1」、「担当者は各学科時間割表参照」、さらに、「20名を目安とする少人数のクラス編成で、図書館での文献検索、レポート作成方法、プレゼンテーションなど、大学における学習の基礎的技法・能力を双方向的・実践的指導によって養成し、後期中等教育から高等教育へのスムーズな移行を可能ならしめる」と記されている。

移転時の全学的とりきめのひとつに、「全員が、専門科目のほかに1つの教養科目をもつ」というものがあった。私の場合、3学部構成になった初年度からその体制の終わる今年度までの10年の間、教養科目としては、前半期に「教養演習」、後半期に「フランス語初級」を持った。したがって新基軸科目をその初期の段階で担当したわけである。

全学シャッフルクラスにするまで、とりあえず、各学科で昼間主2クラス、夜間主1クラスを作り、その学科の教員が担当することとなった。この新科目の趣旨を実現するにはどのようにすればよいだろうかと、初めに担当した教員たちは、水曜日1限の教室からもどってくると、教員センターでお互いのテーマや工夫を語り合ったものだ。

2. 「教養演習」消滅の経過

しかし、来年度、2009年から「教養演習」は姿を消すことが決まっている。この科目のたどった運命は、大学改革というものの弱点を集約的にあらわしているように、私には思われる。

教授会でくりかえし、「これまで必要性が叫ばれながら欠けていた科目だ」と言われたはずなのに、学科の専門にとらわれないシャッフルクラスに移す手続きも、いつまでたっても開始されなかった。過去の「授業時間割表」を調べたら、平成13年まで、「教養演習」は「一般教育科目」なのに各学部の専門教育科目の時間割表中に記載され、すでに初年度の平成10年度(1998)から、時間帯(昼水1限、夜月6限)にずれがあり、2年目の平成11年度(1999)には、3学部6学科がとりきめとは異なる時間帯に置いている。その翌年には、少人数のはずが2クラス合併にしたところがある¹²⁾。新入生にセクシュアル・ハラスメント防止を啓発するのに、全学いっせいの教養演習の時間に学生を集めればどうかという案が多くの教員から出されたとき、「この授業の趣旨に沿わない」などのよく納得できない理由で葬られてしまった裏には、こんな事情があったのかと、今になって理解できた。

シラバス集を読みかえしてみると、3学部ほとんどの学科の教養演習の年度タイトルが「大学で何を学ぶか」等、当初趣旨に沿うものである中で、一部に、濃淡の差はあれ、初年度から学科入門講座的なタイトルが散見される。本学はじめての Faculty Development 研究会(2003年8月)では、「教養演習」は3本柱の一つだったのだから、このころにはまだ、科目設置の趣旨をどのように実現していくかという雰囲気があったのだろう。しかし、しだいにうやむやとなり、出発前の全学的コンセンサスを活かす努力をしないまま学科まかせとなり、図書館指導も学生がばらばらに申し込む方式となり、ついに廃止と決まってしまった。しょせん初めから無理な企画だったのだろうか？

近年、我々は悪擦れしてしまい、2009年からの新カリキュラムも、「4年間さえクリアすればあとはどうとでもかえられるし」とか、さらには、文部科学省の指示が妥当でなくとも、きちんとした反論もしないで「はいはい」と従っておく、という態度になってしまっている。しかし、長久手移転のときはそうではなかったはずだ。高田町において、何度も新大学構想を壊されて、やっと実現することになった将来計画であり、個々の計画

に激しい賛否の討議はあったが、みな、立てた理想を、一回り大きくなった大学でこれから実現するべく、計画にしたがって運営していこうという思いは同じだったのではなからうか。それが、ほとんど移転直後に、新学長が「大学改革・編成替え」を宣言した。ドイツ学科の教員が、「新学科はまだ2年生までしかいない。卒業生も出していないのに、どこが悪くて改革せよというのか」と嘆いていたが、そんな声も次々に課される文書立案の多忙の中でかきけされていった。私たちは移転にあたっての理想を地道に実現させる努力ではなく、たえず「改革」に追い回され、一時しのぎの作文に身と時間とを削っているようである。

「教養演習」が消えることになった原因の一つに、当初の授業イメージの問題もあるのではなからうか。この科目には「誰が担当しても同じメニューが提供できるようなマニュアルを作る」という計画があったようである。そのようなはっきりしたマニュアルは結局は作られなかったが、しかし、「どの教員が担当しても同じメニューとなるように」、ひいては「画一的な授業であるように」と要求されているという、おそらく誤解を、うむことにならなかつただろうか。「どの教員が担当してもよい、どの教員も担当できる」ということと、「画一的にする」ということとは別問題であろう。科目の目指すところは同じでも、授業展開はそれぞれの教員に任せる、それぞれのやり方を活かすという闊達さが要請されなかったことが、教員側のとまどいと萎縮をうんだようにも思われる。

3. 「やがて社会へ出たときに」

私はこの新科目を2005年まで計5回担当した。他クラスの担当者とうよう、何をすればよいか、いろいろと迷ったが、ほとんどの年度で非常に楽しい授業になった。4年生になった学生にキャンパスで出会って、「教養演習は楽しかったね!」と声をかけられたときは、こちらも幸せな気持ちになったものだ。

はじめに、この科目は新入生対象とはいえ「演習」科目なのだから「研究演習」で用いた打ち合わせ方式・学生主導にしよう、と決めた。図書館利用案内の日にはあらかじめ学生に課題を出しておき、私も同行した。「案内して下さった司書は誰か、どんなことを教えてもらったか、よく理解できたか、あなたは何を質問したか、友人はどんな質問をしたか、図書館に要望すること、全体的感想」などの項目について、学生はメモしながら

よく聞いていた。レポートには氏名・提出日などを記入した表紙をつけること、内容によく合った魅力的なタイトルをつけること、なども指示した。翌週に提出されたレポートをまとめて、担当司書にも閲読してもらった。

教室で、文献の調べ方・レポートの作成方法など、この科目に委ねられた事柄をこなすのには、学生がいずれ社会で働き、自分の力で生きていくことを展望する具体的なテーマをとりあげるのがよからうと考え¹³⁾、ジュニア新書やNHKの人間大学講座テキストなどを用いて、学生に関心をもってほしい問題を取りあげることにした。研究演習では1回の授業を一人の学生で担当したが、教養演習は半年科目なので、全員が担当できるように2人ないし3人で1組とした。おおよその計画を立てると学生が報告に来る。彼らの授業展開の予定を聞いて打ち合わせ、アドバイスをした。毎回、学生は前回までの授業をふまえて、よく調査し、豊富な資料を作成してきた。

いつの年度だったか「女性差別撤廃条約」を取り上げてみた。これは高田町時代に複数教員で企画した男女共生の特別講義¹⁴⁾の延長という気持ちだった。そのときは、国連の「女子差別撤廃条約」の英語正文をテキストにしたが、条約の日本語正文に解説を付けた岩波ジュニア新書『女性の権利ハンドブック——女性差別撤廃条約——』を書店で見つけたからだ。「女性差別撤廃条約」は、1975年の国際婦人年を契機に、それまで人類が築きあげてきた人権条約類を集大成して練り上げられた画期的な条約である。この新書には、とっつきやすいように、中に10のコラムが設けられ、「アンペイド・ワークは〈ただ働き〉か?」「日本と中国——理想の母は?」「国技館は〈女人禁制〉」など、学生たちが当たり前のように思っている日常生活にひそむ問題例があげられている。2人で1コラムずつ担当し、その話題に関係する条文を討議させた。

下宿生活の学生が、「新聞販売店のおじさんが来て新聞をとれと勧めたの。余りしつこいので断ったら、女の子は素直がいいのだよと言うの。私は〈あ、おじさんの言っていることはジェンダーだ〉って思って、そうやってやったの。ジェンダーという言葉がこの授業で知ってて本当によかった」と話してくれたことがある。ささやかながら、彼女の生きる力の一つになったのだ、と思った。

「労働」を問題にした2002年度の学生たちは元気がよかった。私が労働にかかわりそうな主題を多数挙げて、好きなテーマを選ばせた。あとで作

成した期末試験答案集の冊子を見ると、10回の発表タイトルは、「さまざまな職業と専業主婦」「ライフサイクル」「育児と仕事」「仕事と報酬、生活保護」「職場における女性差別」「教師は楽か?」「乳児保育」「農業」「外国人労働者」「労働法」であった。そのほかに、図書館見学、就職関係説明会への出席、ビデオ「クローズアップ現代：農業をめざす若者たち」の視聴をおこなって、レポートを課した。

第1回目に、学生たちは「働く」という言葉の意味を考えた。「泥棒や詐欺で収入を得るのを働いたと言えるか?」「家事労働は働くと言えるか?」と議論した結果、学生たちが納得して「働くこと」に与えた定義は、「社会に貢献してお金を得ること」だった。以降はそれを踏まえて展開した。学生との認識の違いを見せつけられたのは、学生たちが教員という仕事を、休みが多くて楽なものだと思いこんでいることだった。このテーマを考えた学生たちは、「らくに決まっている」という予断をもって母校の高校へ突撃取材に出かけたのだが、先生たちが次々に来て取り囲み、「聞いてくれ、書いてくれ」と、いかに毎日が忙しいか、夏休みなどないと同然、と口々に話すのでびっくりしてしまったと言っていた。(大学でも、ときどき「先生たちは夏休みが長いのに何をして過ごしてみえるのですか」と聞く学生がいる。)外国人労働者問題をとりあげた学生たちは保見団地まで数度出かけた。「将来は農業をやりたい」と夢見ている学生が半数をこしているのにも驚いた。

この年度の期末試験は、資料持ち込み可として、教室で課題を与えた。配布したA4答案用紙にレイアウトを考えながら直接にペン書きすることを要求した。答案は緊張したていねいな文字で書かれて、冊子にしても見栄えがした¹⁵⁾。7月31日に実施した試験問題は次のとおりである。

2002年教養演習フランス学科1年aクラス前期末試験問題

「働く」という問題を取り上げて半年間の教養演習をおこないました。答案用紙紙面全面を使い、配分に気をつけて、A～Dまでの間に過不足無く答えて下さい。

- A. 自分自身の担当したテーマとその発表を、全体の中に位置づけて振り返る。
 グループ・メンバ：
 取り上げたテーマ：
 自身の決算書をまとめてください。次のようなことを盛り込みつつ。

- * そのテーマを選択した理由
 - * 当初の狙い(軸に据えること・クラスメートに何を伝達するか・何を考えてもらうか・どのような参加をしてもらうか etc.)
 - * そのための工夫
 - * 結果として、達成できたと思われること・得たもの・こうしたらよかったと反省すること。等々
- B. 他グループの発表について、興味深かったものは何ですか? どのところが?
- C. 他グループの発表で、自分ならこう扱うのだが、という意見を書いて下さい。
- D. シラバスに記した目的:「学ぶとは?」「働くとは?」を考え、友人と討論する。討論になるように自分で調査して説得的な資料を作る。分かりやすく発表する。友人の意見に耳を傾ける。自分の意見をはっきり述べる”はこの授業でどの程度達せられたと考えますか? 不十分とすれば、その原因は?
- E. 教養演習という科目ではどんなテーマを取り上げるといいと思いますか? (後輩のため・再履修のため!)

教養演習ではいつも、学生たちに、「卒業してからずっと働きつづけるか?」と尋ねた。答は、女子も全員が「働きつづけたい」とはっきりと答える。しかし、「じゃ結婚して子どもがうまれたらどうする?」と問うと、ほとんどの女子学生が、「私が育てます」と答えるのだ。あんなに必死の就職活動で得た職場なのに、なぜ女性がやめていくのかを、学生たちは、ほとんど理解していないことを実感する。ときおりは保育所育ち、学童保育そだちという学生もいて、クラスメートの質問に、「いいものだよ、さびしくなんかなかったよ」と答えていた。

2005年の夜間主の教養演習では、そのころ、オカルトや詐欺などで多数の学生被害者が出ていたので、NHK 人間講座「だます心だまされる心」をテキストにして「うそ」を多角的に考えることにした。シラバスには次のようなお誘いの文章を書いた:「教養演習は、初めて大学へ入った人たちにとっての花形科目です。高校までに蓄積した基本的知識をフルに使って、今度は自分で調べて・考えて・まとめて・発表する時間です。このクラスでは「うそ」をテーマにして進めます。だまされるのが楽しい手品やエイプリル・フールのようなうそから、重大被害を生む不快な詐欺までを、いろいろな角度から考え、討議します。このような作業のために不可欠な、図書館の利用法、文献の記載の仕方等、大学で学ぶための基礎的な方法を身につけます。」

最初の章は手品で、担当学生はトランプマジックやスプーン曲げを覚え

てきて披露した。「こっくりさん」の仕組みを説明する章では、担当者が部屋を薄暗くしてまじないの言葉を唱えると、本当に透視力があると信じている学生たちからは「怖い」という声があがった。マスメディアの報道に作為のある例を取り上げたときには、情報教育を受けてきた強みを発揮して、学生たちは積極的にパソコンを活用し、インターネットからマスコミの報道とは異なる、興味深い映像を引き出して見せてくれた。

Ⅲ 基礎演習

1. 「基礎演習」の新設

「基礎演習」もまた、長久手校地移転時に新設された科目である。「教養演習」が学科にとらわれない科目とすれば、「基礎演習」は2年生を対象に、本格的にそれぞれの専門に入っていくための、準備の科目と位置づけられた。

フランス学科では、これは旧カリキュラムにおいて昭和45年(1970)に1・2年対象に設けられ、昭和50年(1975)に2年対象に限定された、「フランス研究講読Ⅰ」とほぼ等価の科目である、という説明を受けた。「フランス研究講読Ⅰ」は、1年次に週5回の「基礎フランス語Ⅰ」によってフランス語のあらましを学んだ学生たちに、はじめて、フランス語で書かれた本格的な文章を読ませるのが趣旨であり、私も数度担当したことがある。「講読」科目なので旧カリでは2単位のものであった。1998年からは同じ趣旨の科目が4単位ものになったわけである。

旧カリ「フランス研究講読Ⅰ」は、語文系列と地域系列の2クラスを設置して、どちらの系列の原書に取り組むかが、将来の卒業論文のテーマ選びの第一歩になる役割もあった。「基礎演習」もその役割をうけつぎ、学生は、基礎フランス語などの語学科目や教養演習が名簿順に機械的にクラスわけされるのとは違って、自分で語文か地域かを選択できる。また、分割2クラスを同一時間帯に置いて、この学年を一堂に会させることができるように組んであった。

2. 分割クラスの過疎過密

私が「基礎演習」を担当したのは新カリ後半期の2004年度と2007年度との2回である。2004年度は、語文系・社会系に分割した2クラスへ学

生がほぼ半数ずつ来てスムーズに開始した。この前年に私は1・2年次科目「フランス研究概論」の語文系列を担当していた。その学生たちが来たのである。ところが、前年度に1年次科目を担当していなかった2007年度の初日は、大変だった。H棟4階の教室へ入ると、学生が3名しかいない。他の学生は全部、社会系列クラスを選択したということだ。同棟3階の別クラスをのぞくと、ここは再履修生もふくめて40名ほどであふれかえり、担当教員がなんとか数を減らそうと試みているところだった。1年次に「フランス研究概論」で社会系列を履修していない者を外すべく問いかけても、ほぼ全員が履修済みである。1・2年向け「フランス研究概論」は、ある年度まで社会・文化の両分野クラスを同一時間帯に置いて、各学年でどちらかしか履修できないようにしていたが、このころは別時間帯になっていたのだから、学生は1年次に両分野とも履修してしまっているのだ。困り果てた教員が「これでは授業ができません」と呼びかけると、数名が教室を出てきた。こうして4階で待つこと数十分、どうやら私のクラスも20名ほどになった。先生の呼びかけに心を痛めて、アンバランス解消のためにしかたなく来てくれた学生たちである。でも2004年度の経験から、「基礎演習」はきっと楽しい授業にできるという自信があったので、私の顔はひきつってはいなかったはずだ。

「基礎演習」はいわゆる「講読」ではあるが、せっかく「演習」という文字がついているので、演習方式・学生主導で文学作品の読解をやってみようと考えた。2名を組ませて、1課ずつ担当を決めた。担当学生はその課の文章を徹底的に予習してから私と授業展開を打ち合わせる。発音や文法事項での弱点はどの学生も共通しているので、教師が教室で指摘するのではなくて、理解した学生が、クラスメートの誤りを注意することにしたのである。また理解したかどうかを確認できるような練習問題を作ってくることも担当学生に課した。あるいはあらかじめ宿題を作って前週にクラスメートに配ったり、重点的に予習すべき事項を教務課の掲示板で告げたりさせた。

まだ十分にはフランス語原文の読めない学生たちだから、打ち合わせをして、「これでやれそうです」と彼らが言うまでには、ほぼ2時間かかった。「研究演習」は1時間半くらい、「教養演習」は1時間くらいで打ち合わせがすんだが、細かな文法事項まで詰める講読を学生が主導するための準備はなかなか大変なのだ。2名の学生と私とが同時に2時間を確保すること

もけっこう困難だった。学生の空き時間は一致していない。こちらも授業・会議などでなかなか自由な時間はない。学生はアルバイト日を作りくりし、私も遅くまで居残ったり、自宅研修の計画を変更して付き合った。

3. 文学作品を読む

2004年度に選んだテキストは、スタンダールの『赤と黒』をリライトした教科書版である。むかしフランス学科で学び、大阪大学仏文大学院に進学した卒業生が編集した教科書を用いた。一つの文学作品をとりあげたならば、最初から最後までをながめたいという思いを一応満たす教材だった。それぞれの課が、小説の主要場面の易しいリライトであるが、課と課とをつなぐストーリー概略を日本語で紹介して筋の最後まで分かるようになっていし、原文の抜粋も入っていた。

『赤と黒』はサブタイトル「1830年年代史」が示すように、単に恋愛だけではなく、貴族社会・閉塞状況にある有能な平民・ナポレオン追憶など、社会背景を視野に入れねばならない作品である。回によっては、語学的な面とともに当時の歴史も調べてきてあって、クラスメートは作品を多面的に楽しめたようだった。

学び始めて2年目の学生にとって難しいこととは分かっているが、やはり、作品をフランス語原文そのもので読ませたかったので、2回目に基礎演習を担当した2007年度には、半期で読み切ることのできるモーパッサンの短編を選んだ。

前期『シモンのパパ』は、未婚の母の息子シモンが小学校入学早々に子どもたちからいじめられ、川で死のうとしているところを救った男が、シモンの父親になってくれる物語である。自分が未婚の母になる状況など、もちろん考えることもできない学生たちだが、授業中の反応を見ていると、そのような「異文化世界」にいる人々の心や悲しみにも共感をいただくことのできる想像力を養う力が、文学作品には有ることを実感した。だが、心やさしい学生たちは、シモンの母親に対して人々がどのような形で意地悪をするのか、モーパッサンの怒り、「いい人」である「男」にも、世間一般の人々と同じエゴイスティックな動機があったことが描かれているところ、などには気づきにくい。ディスカッションの中で、私が、「人生経験に乏しいあなたがたには分からないかもしれないけれど」のような言葉をしばしば発して、学生たちは苦笑していたものだ。「演習」形式だったか

からこそ、読解を深める討議ができたと思っている。

前期末試験には、テキスト2頁ほどを丸暗記してきて答案用紙に再現することを課した。学生は「そんなにたくさん暗記できない！」と抵抗するが、じっさいの答案はほとんどの学生が満点に近い。フランスへ行ったときに、モーパッサンの文章をそらで言ったらびっくりされるよ、すばらしい財産になるよ、と学生を励ました。

後期には『首飾り』を読んだ。安月給の公務員が、贅沢を夢見る妻のために大臣主催の夜会の招待状を手に入れた。夫のへそくりを吐きださせてドレスを買い、お金持ちの友人に借りた見事なダイヤモンドの首飾りをつけ、夜会で大成功をおさめたが、帰宅途中に首飾りを紛失した。友人に知られぬようにそっくりなものを買って返し、莫大な借金を返済するために10年のどん底生活の辛酸をなめた。返済し終わったときに、借りた首飾りはイミテーションであったことが分かる、という筋である。結末のどんでん返しに読者はかなりのショックを受ける。

前期に、文法知識とその運用はだいたい身につけていたから、学生たちはストーリーそのものの読解を楽しむ余裕もできていて、ディスカッションは前期よりも活発だった。私もむかしこの作品を読んだときには、見栄のために余りにも大きな代価を払わねばならなかった主人公の悲劇と思った。しかし、学生と討議しながら読み進めていると、「悲劇」であろうか？という思いが強くなった。つましいとはいいいながら女中もいたそここの暮らしかから屋根裏部屋住まいへ。日に何度も水くみに階段を上下し、少しでも安くと値切る生活の中で若さも優美さも失う。しかし主人公は、借金を返済したばかりのころに例の友人と道で（それもシャンゼリゼ通りで）出会ったとき、みじめな身なりも恥じることなく声をかけることができた。このたくましさは、夫に寄生しながら不平ばかり言っていた彼女が得た、立派な成長のしるしではないか。原題 *La parure* は「首飾り」よりも「虚飾」とでも訳すべきかなとか、学生に問題を投げかけたものだ。

あとがき

本学に勤務し始めてから41年¹⁶⁾になる。大学教員は10年ごとくらいに勤務校をかわって、新鮮・緊張を保つべきだという人がいて、一理あると思う。しかし常に就職活動をするようになる上に、適合分野の職場が次々

とみつかるはずもない。少なくとも私の場合、同じ大学にいられたために、さまざまな面で仕事がやりやすかった。

ここに挙げた3つの科目の外にもいくつかの科目を担当した。「基礎フランス語」は1年生、2年生ともに担当したし、その種別には総合も文法もあった。「フランス研究各論」では、文学・文化・思想などの分野を担当させてもらった。夜の最終時間帯、黒板いっぱい書かれた学生の解答をみながら考えながら直した「フランス語作文Ⅰ」も、山ほどの配布プリントを印刷した「フランス研究概論」も、思い出深い。また、一般教育・外国語としてのフランス語の授業も何度か持って、フランス学科以外の学生とも接触できたことも、うれしい体験であった。クラス分けでは、英文・英米・国文によくあたったが、熱心な学生が多かった。週2回しかフランス語の授業はないのに、3年次に「フランス語Ⅲ」として、フランス学科の3年生との合併授業では、専門の学生より優秀な成績をおさめることもよくあった。

どの授業科目にもそれぞれの魅力があり、教授者側の抱負があるとはいえ、演習形式の授業は、少人数であり、学生と一体になって進行するところに、いちばん工夫のしがいがあると考え、このような拙文を書かせていただいた。

最後に、大学教員のいくつかの「本務」のうち、教育活動について私見をつけ加えることをお許しいただきたい。

大学の主人公は学生ではないだろうか？ 大学教員に大切な研究活動は、教育活動と連動してはじめて成果あったと言うべきものではないだろうか？ 今年度の「科学研究費補助金」の説明会で、「エフォート欄」は、ありのままのパーセンテージで記入してもらえばよいが、やはり50%はあってほしいと説明者が要請された。しかし、同僚の仕事を見ていると、外国語の作文添削の必要な科目を担当する教員の研究室前には、いつも提出作文と添削済みとが積み上げられていて、どれほど多くの時間を学生の文章の添削に充てていられているかが察せられる。また役職の任にあたれば、研究に割く時間は、かろうじて土日だけ、それも覚束ないのが現状である。このような、授業・学生の研究指導・留学や就職等授業以外の学生関係用務、学内の管理運営関係用務、等々の課されている中で、日常的な研究活動のほかになお、科研費活動に50%の時間が割けるのだろうか、という素朴な疑問を持った。また、それほどのパーセンテージを割くべき

なのだろうか、そのためには、結局、授業・授業準備等の教育活動にあてる時間を削らねばならないのではないか、それでいいのだろうか、という危惧も感じざるをえなかった。

註

- 1) 学生は1単位が不足しても卒業できないという厳格な仕組みであるのに、その単位の数え方は、融通無碍・いいかげんなものだと思うざるを得ない。私自身が大学生になったときの新生ガイダンスでは、講読などの語学系の授業や演習科目は、「教室における1時間、予習の1時間、復習の1時間ではじめて1単位になる」と聞かされ、なるほど予復習しないとイケないのだと納得した。赴任した愛知県立大学の「外国語学部・外国語学部第2部履修規程」は発足時の昭和41年(1966)から平成9年度(1997)まで同一文章で、次のように単位数は名古屋大学と同じだった(しかし、その趣旨は逆に読めてならない)。「第5条(のちに第6条)単位の計算は、1単位の履修時間を教室内、教室外を合わせて45時間とし、次の基準により計算するものとする。(1)講義は、教室内における1時間の講義に対して、教室外における2時間の準備のための学修を必要とするものとし、毎週1時間15週の講義をもって1単位とする。ただし、特別の理由のある時は、1時間半または2時間の講義に対し、教室外における1時間半または1時間の準備のための学修を必要とするものとし、毎週1時間半または2時間15週の講義をもって1単位とすることができる。(2)演習、講読は、教室内における2時間の演習または講読に対して、教室外における1時間の準備のための学修を必要とするものとし、毎週2時間15週の演習、講読をもって1単位とする。ただし、特別の理由がある時は、1時間もしくは1時間半の演習、講読に対し、教室外における2時間または1時間半の準備のための学修を必要とするものとし、毎週1時間もしくは1時間半15週の演習、講読をもって1単位とすることができる。(3)実験、実習および実技は、毎週3時間15週の授業をもって1単位とする。」これが平成10年(1998)の移転時に「(1)講義及び演習については、毎週1時間15週の授業をもって1単位とする。講読は、必要に応じ毎週1時間又は2時間15週の授業をもって1単位とする。(2)実験、実習及び実技は、毎週2時間15週の授業をもって1単位とする。」と、科目と単位数との関係が根本から変えられた。それなのに従前通りであるはずの旧カリキュラム学生に対しては、昼夜異なる対応をしている。フランス学科では第2部在學生にだけ、研究演習にも研究講読にも4単位を与えるという措置をとり(英米2部は講読は2単位のまま)、学部生のほうは入学年度の規程によって縛っ

たのである（冊子「平成10（1988）年度講義時間割表・講義内容一覧、愛知県立大学外国語学部第二部」「平成10年度（1988年）講義時間割表・講義内容一覧、2・3・4年生用、愛知県立大学文学部・外国語学部」参照）。このような異例のダブルスタンダードが教授会で議論されなかったはずはないのに、私はまったく記憶を失っている。

- 2) あとから事情を知った。昭和41年（1966）の「愛知県立大学」の設立認可にあたって、年度順に講師・助教授（当時はこの2つの職階にもそれぞれの定員が決められていた）として赴任する予定の方々のうち、何人かは、「採用年度になるまで、とりあえず助手身分で待っていただく」、すなわち、ティーチング・スタッフになることが決まっていた助手だったのだ。私の赴任した設立3年目以降に赴任した助手は、みなそれぞれの出身大学の指導教官から「2年ほどで講師になれますよ」と言われて来たのだが、実は、予定の方々はすべて講師以上に移りおわったときであり、残っている助手・その後の助手採用者は、講師枠に空きが生じた場合も昇任対象とはされなかったのだ。
- 3) 或る年度に私は3コマの担当を命じられたが、それを伝えた学科の教務委員教授は、「これまでどおり、助手の仕事もきちんとやること」と、改めて付け加えた。「助手の仕事」とは何であったか。大学の歴史の中で、これほどどこかに書きのこさなければならないことである。紛争時には、一部の教授たちは、便利に助手を使っていたにもかかわらず、「助手は授業担当することによって身分の差をあいまいにしようとした」と糾弾したものだ。
- 4) 長久手校地で発足した情報科学部には当初6名の助手が配置されていた。数年してから、数名の助手が授業をおこなうようになったが、時間割表にその名前を出されないままだった。半田暢彦学部長に尋ねると、「大学の決まりで、助手は授業担当できないのだそうだ」と答えられた。外国語学部ではずっと、授業担当すれば、時間割表は担当助手の氏名であり、成績認定権もあった。どうしてこのように誤った情報が伝えられたのだろうか、不思議でならない。
- 5) 反対に2年間とおして聴講できる地域教員ゼミにはコンスタントに受講生があり、卒業論文数も増えていった。これを理由に、地域教員は、新規採用人事で語文を削って地域に振り替えることを要求し、語文教員の数が減少していった。その結果、語文教員はいっそう基礎語学にコマを割かねばならず、専門分野の授業を担当することが難しくなった。つまりかつての教養部対専門学部の葛藤に似た図式が生まれる。この解決策としては、学科の全教員が、専門分野を問わず、基礎語学・ゼミの両方を担当することしかないであろう。定数削減されている現在はいっそうその必要が大きい。すでにフランス学科をはじめいくつかの学科ではその方向性が了承されていることは幸いであ

る。

- 6) フランスで「セミネール」と呼ばれる授業は、今も1年サイクルでおこなわれているはずである。ソルボンヌにあるパリ第4大学の金曜ゼミは、30年以上前から17世紀文学をテーマにして続いている。新学期前に1年間のゼミ予告が出され、日本人をふくむ外国人の参加もいつものことである。日本でも、東京大学前田陽一教授の「パスカルの『パンセ』読解ゼミ」は、東大生のみならず、関東一円の学生が集って連綿と幾十年も続いてきた。大学紛争時には前田教授のご自宅で開かれたという。このゼミが世界でも認められる日本のパスカル研究者の厚い層を形成したのである。
- 7) 修士課程修了時に県立大学に就職がきまっていた私の高校教職免許状(英語)の交付手続きを、多忙な学部事務室が後回しにした。少し経って、履修指導の手違いから4単位不足で免許状が出せないと知らせてきたため、科目履修生となって不足単位を補った。
- 8) 助手初期のころ、助手仲間で、授業担当できないなら自主ゼミをやらうということになり、私は「文学研究ゼミ」を開く旨のチラシを掲示した。参加してくれた5名の学生は全部英米学科だった。このうち一人が名古屋大学英文の大学院に進学していて、川崎先生の授業受講の際にはいろいろ助けられた。
- 9) 川崎寿彦先生はいつも学生のレポートを持ち抱え、会議の席でも読んでいらっしゃる、と聞いたことがある。「教室が勝負の場」という緊張感のみなごった学生指導をされた川崎先生は、同時に、名古屋大学が、ノーベル賞受賞者と並んで世界に誇りえたイギリス文学研究者だった。60歳で現職のまま亡くなられた。
- 10) フランス学科主任、学部の入試委員長(ドイツ・中国という新設2学科の入試が加わり、社会人選抜にも大変更があったときだった)に、7月に倒れた父親の介護が重なったのだった。
- 11) 以前、演劇研究の同僚から聞いたことであるが、実際にお芝居を観た経験を尋ねてみると、大学間格差というものがくっきりと分かるという。「うちの学生たちは、演劇は現代のものも歌舞伎能狂言も、ほとんど観たことはありません。短大生はもっと少なかった。家庭の経済力がそのまま出ている、かわいそうなくらいです」と。それでいて学生はクルマやケータイにお金を使わないわけではない。この同僚教員は、学生たちに本物の劇を観に行かせ、新しい感動を発見させていられるようだった。
- 12) [1998] 西: 木3 / 月6、情報(シ・地): 月2。[1999] 英文: 水1 / 水6、見教: 金3 / 月6、社福: 水1 / 水6、西: 水1・木3に分裂 / 月6、情報: 月2。[2000] 国文: 木3に合併 1クラス / 月6、英文: 水2 / 水6、見教: 金2 / 月6、社福: 水1 / 水6、西: 火4・水1に分裂 / 月6、中: 水1に

合併1クラス／月6、情報：火3。

- 13) 一人目の子どもを産後7週間目の産休あけから託した共同保育所に掲げられていた保育目標の項目の一つは、「やがておとなになったとき」で始まる文章だった。生後43日目から3歳未満の赤ちゃんを預かる保育所の、この遠大な目標に感動したものだ。学生が勤労者となるのはすぐ目の前のことだから、「やがて社会へ出たときに」では、悠長すぎるかもしれない。
- 14) 本学に男女差別問題を取りあげる授業科目が設置されていないという「遅れすぎ」状態は、他大学のジェンダー論研究者たちからよく批判された。高田町では、女子教員を中心に、オムニバス方式で、何度か特別講義科目「男女共生論」などを実施・対応したものだ。長久手校地へ移ると、通勤時間が増え、担当コマが増えて、オーバーワークでのオムニバス授業を組む余裕がなくなった。教養科目は一新されたが、こと女性差別や人権の問題は全学生に取り組ませる課題だという意識は弱いままだという感想をもつ。
- 15) この年は学生部長職にあったので、森正夫学長に1冊進呈した。「教養演習という科目に適っている。すばらしい学生たちだ」と喜ばれた。就職担当の森川哲哉主査に「これ、いいですね!」とほめられたのもうれしかった。
- 16) 正確には40年と11か月。採用決定が遅くて、愛知県立大学助手としての発令は5月だった。「4月は給料は出ませんが、来てください」と言われて驚いたが従うほかなく、週1日の研究日を除き、月曜日から土曜日まで勤務しはじめたのだった。夜間部のあることもこのときに知った。「せめて交通費を出してください」と頼んで受け入れられたが、その出所は学科教員のポケットマネーではなく、外国語学部全体の助手が学生に教科書販売をしたときのバックマージンを蓄えた「助手準備金」だったことをあとで知った。